

はじめに

挿し絵入りのブツダの生涯の物語を書く、というアイデアは、ハンダカ・ヴィッジャーナンダ氏から、およそ二年前に寄せられた。かれはその原稿を書くようにとわたしに依頼し、ミャンマーの著名な水彩画家であるウ・チョウ・ピュー・サン氏に挿し絵の話をもちかけた。それ以来、われわれは手を携えて、親密に協力しながら、このプロジェクトを進めてきたのである。

現在、ブツダの生涯を扱った書物はたくさんある。そのうちのいくつかはシツダツタ王子の誕生からさとりに達するまでの物語で、他のものでは、入滅まで、などだ。しかしながら、そのどれもが生涯のすべてを順序立てて十分に物語っている、というものではない。もし、本書にブツダの生涯のすべてを盛り込んだ「報告書」を期待されるなら、失望されるだけだろう。ブツダの生涯についての最も完全な権威あるものといえば、仏教徒の聖典（三蔵）そのもの以外にはないのだ。

（訳注：三蔵とは、経蔵、律蔵、論蔵。また経蔵とは、長部、中部、相應部、増支部、小部の各経典からなるパーリ五部経典）

わたしが本書を執筆中の日々を過ごしたミャンマーでは、ブツダの生涯の物語について浩瀚な学術書がある。偉大なる学僧、最高賢者ウィチツタサーラピワンサ、というより、ミングン・サヤドーとして知られている方が書かれたものである。彼の方は、四十冊の分厚い書物からなる三蔵のすべてを完璧に記憶されていた。さらに加えて註釈書（義疏）と復註（註釈の註釈）にも精通されておられ、ブツダの教理に堪能

の達人として最高の名誉称号である持三蔵・法宝の持者を獲得されている。その学術書は「The Great Chronicle of Buddhas（諸佛大年代記）」というタイトルで英訳されている。全六巻十冊からなる。ミングン・サヤドーへのわたしの大いなる尊敬をひとまず脇に置くとして、この浩瀚な学術書といえども、やはり、完全なものではないと見なされる、と言ってさしつかえない。くず拾いのスニータ（本書36話、以下同）、七歳の阿羅漢ソーパーカ（35話）、切り取った指を首飾りにした殺人鬼アングリマーラ（53話）などの話は見当たらないのだ。しかし、それなら「ブツダの生涯の完全な物語なんて、見つからないのではないか？」ときかれるかも知れない。いや、確かに見つけれられるのだ。しかし、見つけれられるのは、三蔵それ自体の中からのみと、併せてその註釈書と復註の中からのみである。問題は、手に入る材料のすべてがそのような膨大な経典の中に分散しており、初めから終わりまで年代順にそろった物語を得るためには、それらを拾い集め、配列し直す必要がある、ということである。

わたしは、ブツダの生涯の物語を代表する六十九話を選んだ。ブツダがスメータとして存在していた過去世から話は始まり、菩薩（訳注：さとりに達して覚者となる以前の修行者）としての最後の生存とな

るシッダッタ王子の誕生、ブッダとなって以降の伝道教化の四十五年間、^{バリニッバーナ}般涅槃（入滅）まで、である。

それにはまた、仏弟子たちが、世代から世代へ、二十一世紀に至るまで、ブッダの教えを護り、進め、広めてきたやりかたも含まれている。本書を話から話へと読んでいくことによって、ブッダの生涯の最初から最後まで、その全体像をあなたは得ることができるだろう。かれの生涯、そして仏弟子と仏“敵”たちの多くの面がわかるだろう。さらにまた、ブッダが人生の諸問題についてどのように対処し、説き諭し、解決したか、わかるだろう。それらは二千五百年以上前の人間が直面していた諸問題だが、今日でもいまだにみつかれるものである。

幼い男の子の突然の死で半狂乱になる若い母キサーゴターミー（58話）に、あなたは出会うだろう。夫と夫の両親にひどく嫌われることを恐れ、わが子の死という事実を、彼女は受け入れられなかったのだ。男の子はただ病気なだけ、と自分を納得させ、薬を見つけようと家から家を訪ねて行くのである。この話は、愛することもを亡くして落ち込む今日の母親たちを思い起こさせる。ちょうどパターチャーラー（59話）が、夫、こどもたち、その他の家族に次から次へとたった一日で死なれて気が狂い、裸でさまようのと同じように、今日でも愛する両親、夫、妻、こども、ガールフレンド、ボーイフレンド、あるいは財産を失って、気が狂ってしまう人たちを見かけるのだ。

あの世尊、一切知者でさえ、過去世の行為（業）^{ごう}の果報から逃れられなかった、ということをおあなたは知るだろう。弟子が裏切り、暗殺しようとした一方、嫉妬した異教の指導者が、あらゆるやりかたで中傷し、非難し、大勢の人たちの前で論争しようとした。他方、彼の方はまた多くの者たちから敬愛され、賞賛され、礼拝され、崇敬され、尊敬される師である。しかし、生涯の浮き沈みに世尊がどのように対処されたかが、かつて存在した精神的指導者の中でも、彼の方が最も偉大である、と証明しているのである。

そのうえさらに、世尊の両親、息子、弟子たち、“敵たち”、異教の指導者たちなどへの態度も知ることになるだろう。しかし、あらゆるものごとの中で最も偉大なのは、世尊がわたしたちに最高の幸福への道を示されていることだ。これは仏教独自のもので、他の宗教の教説には存在しない。最高の幸福への道は、民族やカースト、社会的な性差別、国籍、経済的地位、社会的身分、その他の特徴でも差別せず、生きとし生けるものすべてに普遍的である。天上界の神々や地獄の悲惨な生命にすら当てはまるのだ。

議論のあるポイント

ここで、わたしが本書を執筆しているあいだに見つけたいくつかのポイント、それには議論があって、まぎらわしいのだが、そのようなポイントについて述べてみたい。すでに述べたようにブッダの生涯の物語とブッダの教えは、多数の三蔵経典、註釈書、復註に分散している。わたしたちは三蔵のみからでは完全な物語を得られない。たとえば、三蔵中のパーリ語のダンマパダ（法句経）は、世尊が口にされた423の美しい偈（^げ韻文、仏教詩）からなる。しかしながらわたしたちは、世尊がそうした偈をどんな状況下で口にされたのかは註釈書でのみわかるのだ。その他の物語も同じである。それゆえ註釈書はパーリ語や文法の

説明だけでなく、関連する因縁話も提供しているのである。

1. アーナンダか、王家の象か？

菩薩の七つの誕生仲間としてアーナンダは、本生物語の註釈書と仏種姓経の註釈書で言及されているが、増支部經典の註釈書「マノーラタプーラニー」では王家の象アローハニーヤの名がアーナンダの代わりに挙げられ、その他の六つは同じである。このまぎらわしさに直面して、わたしは本書ではアーナンダを

入れることに決めた。本生物語の註釈書と仏種姓経の註釈書では、生涯の物語に、より関心を寄せている一方、「マノーラタプーラニー」は、より法話の説明に傾いていることを考慮したからである。

（訳注：「七つの誕生仲間」は4話でふれられるが、ヤソードラー妃、御者チャンナ、大臣カールダーイー、王家の馬カンダカ、アッサッタ菩提樹、黄金の四瓶、そしてアーナンダ尊者。菩薩降誕ときっかり同時に誕生したとされる。従って、南伝ではブッダと侍者アーナンダは同年齢だったと信じられている一方、北伝ではアーナンダ尊者が年下で年齢差は三十歳、などともいわれている。なお、アーナンダ尊者はブッ

の従兄弟で、仏弟子中、「多聞第一」。ブッダ晩年の二十五年間、専従の侍者としてお世話した。仏典の

第一結集では記憶していた經典すべてを「如是我聞」（わたしはこのように聞きました）という始まりで誦出した。仏弟子中、記憶能力第一で、美男だった、とも伝えられている）

2. セーナーニガマ？

菩薩がさとりに達する前の朝、スジャーターが一碗の乳粥を献げてくれた。「ブッダとその教え」（ナラダ長老著、1988年、マレーシア）では、スジャーターは市場町セーナニの長者の娘となっている。しかし、ミングン・サヤドーの「諸佛大年代記」では、スジャーターはセーナーニーという名前の長者の娘で、市場町セーナに住んでいる。中部經典の註釈書「パパンチャスーダニー」は、セーナーニガマとは「市場町セーナ」という意味で、かつて軍隊が駐屯したところ、としている。また、セーナーニガマとはセーナーニ

「村」という意味で、スジャーターの父セーナーニーが住んでいた、とも説明している。相應部經典の註釈書「サーラッタッパカーシニー」は、セーナーニガマとはかつて軍隊が駐屯したところで、その後、スジ

ャーターの父セーナーニーが市場「町」に住んでいたと説明している。このようなさまざまに異なる解釈から、わたしは「サーラッタッパカーシニー」の説明を選ぶことにした。セーナーニーが長者であり、長者

なら一般的にはふつうの「村」よりはかなり発展した村、すなわち市場「町」に住んでいたのだろう、と考えたからである。

3. 豎琴の調弦のたとえ

菩薩はウルヴェーラーの林で六年間、過酷な ^{ドゥッカラチャリヤ} 苦行の實踐に身を投じた。その六年間の終わりに、苦行の末、死の瀬戸際にあつて、近くを通りがかった少女の一団が豎琴の甘い調べに合わせて歌うのを聞いたのだが、豎琴の弦は弱すぎず強すぎず締められたときのみ甘い調べを奏でる、というのである。このたとえは、ブツダの生涯の物語に関するいくつかの本に書かれている。しかしながらわたしは、それをパーリ正典では見つけれなかった。一つの記録としては、^{ヴィナヤ} 律 ^{ピタカ} 蔵 ^{マハー} の ^{ヴァッガ} 大篇には似たようなたとえがある。それによるとブツダは、ソーナ・コーリヴィサ長老に歩く冥想にあまり精励しすぎないように、と諭している。

(訳注：ソーナ・コーリヴィサ長老はアンガ国の首都チャンパーの長者の子で、出家して猛烈に修行に励んだが、^{げんぞく} さとれず、還俗を決意したところ、ブツダにこの弦のたとえで諭され、ついに解脱した。仏弟子中、^{テラガター} 勤精進第一とされる。長老偈の十三偈集632～644に遺偈がある。なお、^{ヴィナー} 豎琴は琵琶、^{くご} 箜篌という訳もあり、^{はつげん} ハープ風かギター風か不明だが、弦を指ではじく撥弦楽器の調弦で強弱の両極端ではない「中道」を教示したとみられている。一方、馬場紀寿著「上座部仏教の思想形成－ブツダからブツダゴースアへ」によれば、パーリ正典 (Canon) とは、五世紀前半にスリランカで活躍したブツダゴースア長老が確立したパーリ語の三蔵を指す。ブツダゴースア長老は「清浄道論」と、長部、中部、相応部、増支部の四經典の註釈書の著者)

4. ^{よる} 五群比丘の預流のさとり

わたしは、註釈書のいくつかの情報がパーリ正典とはちがうことを見つけた。一つの例は ^{バンチャヴァッギヤピック} 五群比丘 ^{ソータバッティ} が預流のさとりに達した件である。律蔵の大篇は、ワッパとバッドィアがサーワナ月の満月の後、月が欠けていく時期の初日に預流のさとりに達し、さらにマハーナーマとアッサジも、その二日目に達したとしている。しかし、律蔵の註釈書「サマンタパーサディカー」によれば、ワッパはサーワナ月の満月の後、月が欠けていく時期の初日に、バッドィアはその二日目に、マハーナーマは三日目に、アッサジは四日目に、それぞれ預流のさとりに達した。この例を通して、わたしたちは註釈書が必要不可欠とわかるのだが、しかし、注意深く分析する必要もある、ということである。

(訳注：さとりには四段階、四つの階梯^{かいてい}があり、預流^{よる}、一來^{いちらい}、不還^{ふげん}、阿羅漢^{あらかん}。それぞれのさとりに向かう瞬間と、さとり^{しろうはっばい}に達した以降を、計八つにしており、預流道・預流果、一來道・一來果、不還道・不還果、阿羅漢道・阿羅漢果。総称して四双八輩といわれる)

5. スッドーダナ王の死

ブッダの初の帰郷の話(30話)で、父王スッドーダナが病気で重態になったとき、世尊がやって来て、真理を説き、阿羅漢のさとり^{しろうはっばい}に導くのである。しかしながら、病気と老齢のために在家の阿羅漢として亡くなった。ここでわたしは別の意見を披露したいと思う。(1)「ブッダとその教え」(ナーラダ長老著、1988年刊、マレーシア)、(2)「ブッダ：その生涯と初期仏教の歴史探究」(スリ・ペーमारローカ長老、2002年刊、シンガポール)、(3)「ブッダと仏弟子たち」(レーワタ・ダンマ長老、2001年刊、ミャンマー)の三著では、スッドーダナ王は阿羅漢のさとり^{しろうはっばい}の至福を経験しつつ七日間過ごしたあとと亡くなった、としている。

「ミリンダ王の問い」^{バンハー}では、ナーガセーナ長老がミリンダ王に、阿羅漢になった資産家には二つの可能性^{しろうはっばい}がある、と説明している。まさにその当日に出家するか、最後の涅槃(入滅)に達するか、の二つである。しかし、このような説明はパーリ正典には見つからない。ほかならぬこのポイントについて、ミングン・サヤドーの「諸佛大年代記」では、増支部經典の註釈書「マノーラタプーラニー」と同じように、スッドーダナ王は阿羅漢になったあと、黄金宮殿の白い傘の下で最後の涅槃に達した、と短くふれている。

6. 人さし指か、親指か？

切り取った指が首飾りの殺人鬼アングリマーラ^{しまん}(指鬘)の話(53話)で、アングリマーラが犠牲者から切り取った指は、親指か、人さし指か、というもう一つの議論のあるポイントに、わたしはさしかかった。ブッダラッキタ師の著書「栄光の凱旋」(2000年刊、マレーシア)によると、アングリマーラは犠牲者の親指を切り取って首飾りにしたという。ミャンマーで一般的に受け入れられている話によれば、「ブッダの生涯とその教え」(ミン・ユ・ワイ著、2001年刊、ミャンマー)に書かれているように、アングリマーラは犠牲者の人さし指を切り取っているのだ。しかしながら、「アングリマーラ経」(中部經典86)を詳しく読んでみても、アングリマーラが切り取った指が親指か人さし指か、わたしたちには見つからない。アングリマーラは犠牲者の指を切り取った、とのみ書かれているのだ。さらに註釈書と復註にも、これについての正確な情報がない。このまぎらわしさに直面して、わたしは単純に、パーリ正典に従うことに決めた。アングリマーラがじっさいに切り取った指がどっちは脇に置いておくことにしたのである。

7. 養母マハーパジャーパティール・ゴータミーがブッダに出家の許しを求めたのはいつか？

ナーラダ大長老は著書「ブッダとその教え」で、世尊が釈迦国のニグローダ園（僧院）に在住されて釈迦族とコーリヤ族の争いを静めたとき、マハーパジャーパティール・ゴータミーが世尊に申し出て、僧団に女性が入れるよう求めた、と語っている。それはブッダの五回目の雨安居の直前に起きた、と。

しかし、わたしが調査しているうち、釈迦族とコーリヤ族が激しい言い争いになり、ローヒニー川の水をめぐって戦争寸前にまでなったのは五回目の雨安居直前だ、とわかった。世尊は川の付近の戦場へ来て、双方の軍勢を静め、平和に戻したのである。そのあと世尊は、釈迦族とコーリヤ族の王族の青年五百人と

ともに釈迦国の首都カピラヴァットゥ（カピラ城）近くの^{マハーヴァナ}大 林 へ行かれた。五百人はのちに出家して比

丘となった。のちに世尊は^{マハーヴァナ}ヴァッジ国ヴェーサーリー近くの^{マハーヴァナ}大 林 精舎へ行かれ、そこで五回目の雨安居に入られたのである。

ここでわたしは、世尊が争いをおさめるために二度目にカピラヴァットゥを訪問したあいだ、世尊はニグローダ園ではなく、カピラヴァットゥ近くの大林に滞在されていた、ということを確認しておきたい。したがって、この期間にマハーパジャーパティール・ゴータミーが世尊のもとに来ることはなかったのである。彼女がニグローダ園に在住されていた世尊に出家を申し出たのは本当だが、そのことが起きたのは世尊が最初にカピラヴァットゥ訪問していたあいだであって、二度目の訪問ではない。それゆえ、マハーパジャーパティール・ゴータミーがじっさいに世尊に出家を申し出たのは世尊の最初の訪問中であるのは明らかで、最終的に出家を許されるまで、彼女はさらにそれから四年待たなければならなかった。彼女と釈迦族、コーリヤ族の王族女性五百人は、世尊が^{マハーヴァナ}ヴァッジ国ヴェーサーリー近くの^{マハーヴァナ}大林精舎で雨安居中に出家

^{ビククニ}して比丘尼となったのである。

ここで、賢明な読者なら、同じ^{マハーヴァナ}大 林 という名前でもじっさいには二つの地名があるのに気づき、混同しないだろう。一つ目は、世尊が釈迦族とコーリヤ族間の争いをおさめたあと滞在されたカピラヴァットゥ

近くの^{マハーヴァナ}大 林 で、ここで世尊は^{マハーサマヤスッタ}「大集会 経」（長部20）を説かれた。二つ目は、^{マハーヴァナ}ヴェーサーリー近くの^{マハーヴァナ}大 林

精舎で、ここで世尊は五回目の雨安居に入れ、女性が僧団に入るのを許されたのである。^{サンガ}

8. 発生時期の特定ができないこと

わたしは、いくつかの話については発生時期をたどれず、特定できなかった。それらは、七歳の阿羅漢ソーパーカ（35話）、くず拾いのスニータ（36話）、病気のプーティガッタ・ティッサ（57話）、亡き子をもとめ半狂乱の若い母キサーゴータミー（58話）、すべてを失い裸でさまようパンタチャーラー（59話）、

遍歴論争家サッチャカ (60話)、ジャイナ教を捨てた資産家ウパーリ (61話)、^{マンガラスッタ}「吉祥経」(47話)、^{メッター}「慈

^{スッタ}経」(48話)である。

パーリ正典はいつでも発生場所を示す。しかしながら発生時期についてはあまり関心を示さないように見える。それにもかかわらず、わたしたちは、ときには補足的な情報を註釈書から得ることができて、一つの話と別の話を、正確な順序に結びつけられるのである。

わたしはこの件について、一つの出来事が起きた場所を考えに入れながら、世尊に伝道布教が可能である年と関連させようと試みた。他の話とのあいだに入れて一列にならべる前に、関連する出来事が、その前なのか後なのか考慮することによって、関連させるようにしてみたのである。例えば世尊はラージャガハ(王舎城)で雨安居を過ごされたのだが、それは、そこで丸一年のあいだずっと過ごされたということの意味しない、というほうが正確である。比丘たちがひとしく秩序ある正しい行動をするように監督する原理として置かれた規定である「律」によれば、ひとりの比丘は雨期のあいだ、ある決まった場所に三か月間、滞在しなければならない。そして残りの九か月間は、場所から場所へ遍歴遊行することだけが許されている。これを考慮すると、わたしのアプローチは完全に正確だとはいい難く、問題がすっかり解消するだろうともいえない。しかしながら、わたしが提示したやりかたはそうした問題を打開する一つの道であり、賢明な読者が分析するため、彼あるいは彼女なりに、より深い調査研究をするための、余地を開くものだ。

具体例を二つ挙げてみよう。一つ目は、生きとし生けるものへの慈悲～^{じきょう}「慈経」(48話)である。この

話はサーヴァッティ^{ジェータヴァナ}(舎衛城)の祇園精舎で起き、雨安居に入る時期が近いときだった。そして、森林にいた五百人の比丘たちに一つの問題がふりかかったとき、比丘たちはその森林で雨安居するはずだったが、そこを離れ、サーヴァッティにおられた世尊に助言を求めて、やってきたのだ。これでわたしたちは、その当時、世尊がサーヴァッティの祇園精舎に、雨安居のために在住されていた、と知るのである。そして、年代順の配列によれば、世尊がそこで雨安居されたのは、いちばん早い年でも伝道布教の十四年目で、あるいはもっとそれより以降、つまり二十一年目から二十四年目まで、ということになる。この前後関係から、「慈経」が世尊によって説かれたのは伝道布教の最初の二十年(成道後二十年の第一菩提の時代)^{パタマボーディ}の時代)のある時期であろう、と推定することによって、この話は伝道布教の十四年目のことだと、わたしは結論している。

二つ目は、^{きちじょう}最上の吉祥～「吉祥経」(47話)で、世尊によってサーヴァッティの祇園精舎で中夜、(訳注：およそ午後十時～午前四時。当時、夜を初夜、中夜、後夜と三つに区分してとらえていた)使者である一人の麗しい神に説かれた。その神に続いて神々とバラモンたちの大会衆が十方の世界から来ているので

ある。この経^{スッタ}はそれ以上の追加情報がなく、註釈書にもない。ここでは雨安居のあいだかどうか、わたしたちには分からない。もしそうであるなら、「慈経」と同じやりかたでこの問題は解決する。加えて、時期を正確に見積もるのがさらにむずかしいのは、世尊が遊行されていた月のいつでも、世尊は祇園精舎に一時的に滞在されたかもしれないのである。それは祇園精舎が建立されたときから始まって伝道布教四十五年目まで、である。ここで、吉祥の叫び声^{マンガラ コーラーハラ}が十二年間続いた、といわれていることを考慮して、わたしはまた、世尊がこの経^{スッタ}を説いたのは伝道布教の最初の二十年間のいつかの時期だったのだろう、と推定している。

(訳注：吉祥の叫び声とは、ミンゲン・サヤドー著「諸佛大年代記」によると、ブッダがいずれ吉祥につい

て説法されると予知した浄居梵天^{じょうこぼんてん}たちが、吉祥を待ち望む人々の思いにも気づいて、十二年間、街道など

のいたるところで待望の叫び声^{とき かんせい}（関の声、喊声）を上げたこと。この世に存在する五つの叫び声の一つで、

吉祥以外の叫び声は、劫^{カッパ}、転輪王^{チャッカヴァッティ}、ブッダ、牟尼位^{モーネイ}（聖人たること）。なお、「吉祥経」は在家信者向けのブッダの「幸福論」ともいわれ、最上のめでたいこと、三十八の吉祥が列挙され、上座仏教国ではよく読誦される)

ブッダの伝道年表

シッダッタ王子はさとりを達して、三十五歳でブッダ（覚者）になられた。そのときからブッダは、真理を四十五年間、たゆみなく教えられた。伝道布教の前半の二十年間は、ブッダはさまざまな場所で雨安居を過ごされた。しかし、後半の二十五年間、ブッダはほとんどサーヴァッティで雨安居された。

以下はブッダの伝道布教の年表で、年代順に、雨安居の場所と、その年の主な出来事である。

◆ 成道の初年（紀元前588年）・・・ブッダ35歳

雨安居の場所：バーラーナシー近くのイシパタナ（仙人集会所）・ミガダーヤ

ろくやおん
(鹿野苑、鹿の園)

主な出来事 ◇ 「^{ダンマチャッカパヴァッタナ・スッタ} 転法輪経^{たい}」(相応部・諦相応2)

アナッタラッカナ・スッタ
「無我相經」(相應部・^{うん}蘊相應6)

アーディッタバリヤーヤ・スッタ
「燃焼經」(燃火の教え、相應部・六処相應3)を説く

^{パンチャヴァッギヤ}
◇五比丘(五群比丘)の歸依(23話)

◇比丘僧団と三歸依の成立

◇ヤサとかれの友五十四人の歸依(24話)

◇最初の布教者を送り出す ◇三十賢群王子の歸依(25話)

◇カッサパ三兄弟と追隨者千人の歸依

◆ 伝道4年目まで(紀元前587-585年)・・・ブツダ36~38歳

雨安居の場所：^{ヴェールヴァナーラマ}ラージャガハ(王舎城)近くの竹林精舎

主な出来事 ◇ビンビサーラ王との約束をブツダが果たす(27話)

^{ヴェールヴァナーラマ}
◇竹林精舎の寄進を受ける

^{オーワダ} ^{バーティモッカ} ◇教誡の波羅提木叉を制定 ◇^{アッガ・サーワカ}サーリプッタとモッガラーナを第一弟子に指名(28話)

◇カピラヴァットゥ(カピラ城)訪問(30話)

^{ヤマカ・パーティハーリヤ}
◇双神変を公開実演する(訳注:水と火を身体から一挙に出してみせる超能力で、ブツダ以外は不可能。二つの冥想を超高速で交互にくり返し、同時に出ているかのようにする)

◇ラーフラ王子とナンダ王子を出家させる(32話)

◇父王スドーダナ、養母マハーパジャーパティ・ゴータミー妃、妻ヤソーダラー妃を聖者の流れ(預流)に導いて定着させる

◇釈迦族の王族青年六人を出家させる

^{ぎっこどく}
◇アナータピンディカ(給孤独)長者と出会う(33話)

◇祇園精舎の寄進を受ける

◇コーサラ国のパセーナディ王と出会う(34話)

◇釈迦族とコーリヤ族の争いを静める(37話)

^{マハーサマヤスッタ}
◇「大集会經」(長部20)を説く

◆ 伝道5年目（紀元前584年）・・・ブツダ39歳

雨安居の場所：ヴァッジ国ヴェーサーリー近くの^{マハーヴァナ}大林精舎・^{クーターガーラサーラー}重閣講堂

主な出来事 ◇父王スッドーダナの死

◇養母マハーパジャーパティ・ゴータミーに、王族女性五百人とともに出家を許す（38話）
◇比丘尼出家の確立

^{ダッキナーヴィバングスッタ}
◇「施分別経」（中部142）を説く

◆ 伝道6年目（紀元前583年）・・・ブツダ40歳

雨安居の場所：ヴァンサ国の首都コーサンビー近くのマンクラ丘

主な出来事 ◇ケーマー妃が出家し比丘尼となり、ウッパラヴァンナー（蓮華色）とともに比丘尼二大弟子の一人になる（39話）

◇弟子たちに、かれら個人の利益と威信のための神変（超能力）披露を禁止 ◇双神変を公開実演する

◆ 伝道7年目（紀元前582年）・・・ブツダ41歳

雨安居の場所：三十三天（忉利天）

主な出来事 ◇双神変を公開実演する

◇アビダンマを三十三天で生母に教える（40話）

◇チンチャマーナヴィカーがブツダの子を妊娠したと中傷（41話）

◆ 伝道8年目（紀元前581年）・・・ブツダ42歳

雨安居の場所：バグダー地方スンスマーラ山（鰐山）のベーサカラー林（恐怖林）

主な出来事 ◇ボーディ王子が布施を納めるため新築のコーカナダ（紅蓮宮殿）に招待する

^{ワーダスッタ}
◇「ブンナ教誡経」（中部145）を説く

◇ブンナ尊者がスナーパラタ国（訳注：インド西海岸北部地方の国）を訪問

◆ 伝道9年目（紀元前580年）・・・ブツダ43歳

雨安居の場所：ヴァンサ国の首都コーサンビーのゴーシタ園（美音精舎）

主な出来事 ◇逆うらみの美女マーガンディヤーの復讐（42話）

◆ 伝道10年目（紀元前579年）・・・ブツダ44歳

雨安居の場所：パーリレイヤカ村近くのラッキタ林（守護林）

主な出来事 ◇コーサンビーの比丘間で長引く争いに出会われ、ブツダはひとりでパーリレイヤカ村近くのラッキタ林に引きこもる。パーリレイヤカ象が付き添っていた（43話）

雨安居の終わりに、サーヴァッティの人々に代わってアーナンダが、ブッダをサーヴァッティに来られるよう招いた。争っていたコーサンビーの比丘たちは、のちにブッダに謝り、争いをおさめた

◆ 伝道11年目（紀元前578年）・・・ブッダ45歳

雨安居の場所：バラモンの村エーカーラーの南山精舎

主な出来事 ◇バラモンの耕田ヴァーラドヴァージャの帰依（45話）

◇クル国カンマーサダンマに行き、「大念処経」^{マハーサティパッターナ・スッタ}（長部22）と「大因縁経」^{マハーニダーナ・スッタ}（長部15）を説く

◆ 伝道12年目（紀元前577年）・・・ブッダ46歳

雨安居の場所：コーサラ国の都市ヴェーランジャー

主な出来事 ◇ヴェーランジャーのあるバラモンの招きに応じ、雨安居をそこで過ごす。不幸にもこの時期、ヴェーランジャーは飢饉になった。ブッダと弟子たちはいつもなら馬の飼料となる粗末な食べ物を馬喰の一団から提供され、食べざるを得なかった

◆ 伝道13年目（紀元前576年）・・・ブッダ47歳

雨安居の場所：チャーリヤ岩山^{パッパタ}

主な出来事 ◇雨安居のあとバツディヤに行き、メンダカ長者、その妻チャンダパドゥマー、息子ダナンジャ、義理の娘スマナデーヴィー、召使ブンナと七歳の孫娘ヴィサーカーが帰依（46話）

◇ヴァッジ国ヴェーサーリーの將軍シーハの帰依（訳注：シーハは、六師外道の一人であるジャイナ教の開祖ニガンタ・ナータプッタの追随者だった）^{ろくしげどう}

◇「大ラーフラ教誡経」^{マハーラーダ・スッタ}（中部62）を説く

◆ 伝道14年目（紀元前575年）・・・ブッダ48歳

雨安居の場所：コーサラ国サーヴァッティ（舎衛城）の祇園精舎

主な出来事 ◇ブッダの息子ラーフラ、さらに高度の教誡を受ける

◇「小ラーフラ教誡経」^{チュララーダ・スッタ}（中部147）、「蟻塚経」^{ヴァンミーカ・スッタ}（中部23）、

スーテローマ・スッタ

「針毛経」(スッタニパータ第2章5)を説く

◆ 伝道15年目(紀元前574年)・・・ブツダ49歳

雨安居の場所：釈迦国の首都カピラヴァットゥ(カピラ城)のニグローダ園(僧院)

主な出来事 ◇ブツダの義父(ヤソードラー妃の実父)スツパブツダ王の死

◆ 伝道16年目(紀元前573年)・・・ブツダ50歳

雨安居の場所：アーラヴィー市(曠野精舎)

主な出来事 ◇アーラヴァカ夜叉の帰依(49話)

◆ 伝道17年目(紀元前572年)・・・ブツダ51歳

雨安居の場所：ラージャガハ(王舎城)近くの竹林精舎・栗鼠養餌所(黒リスが飼われ、餌が与えられていた保護区域)

主な出来事 ◇若い資産家シンガーラカに「シンガーラ教誡経」(長部31)を説く(50話) ◇
遊女シリマーの死

◇「勝利の経」(スッタニパータ第1章11)を説く

◆ 伝道18-19年目(紀元前571～570年)・・・ブツダ52-53歳

雨安居の場所：チャーリヤ岩山

主な出来事 ◇機織り娘の因縁話(ダンマパダ174)

◇獵師クックタミッタの因縁話(ダンマパダ124)

◆ 伝道20年目(紀元前569年)・・・ブツダ54歳

雨安居の場所：ラージャガハ(王舎城)近くの竹林精舎

主な出来事 ◇波羅夷の制定

(訳注：出家した比丘が護るべき戒である波羅提木叉は、伝道布教の前半の二十年は弟子に聖者が多く、必要がなかった。しかし、それ以降、問題が起きるたびに徐々に制定され、結局、比丘二二七戒、比丘尼三一一戒となった。比丘戒は八区分され、波

ラージカ サンガーディセーサ アニヤタ ニッサギヤ・パーテッティカ パーテッティカ パーティデーサニヤセーキヤ アディカラナ・サマタ
羅夷、僧残、不定、捨墮、単墮、悔過、衆学、滅諍。最も

^{パーラージカ}
罪が重い波羅夷は姪・盗・殺人・大妄語の四つで、破戒者は即刻破門される)

- ◇アーナンダを終身の侍者に指名 (52話)
- ◇医師ジーヴァカとの出会い (51話)
- ◇アングリマーラの帰依 (53話)
- ◇美女スダリー殺害で言いがかりの告発 (54話)
- ◇バカ梵天の邪見を正す (56話)
- ◇蛇王ナンドーパナンダを手なずける (55話)

◆ 伝道21-44年目 (紀元前568-545年)・・・ブツダ55-79歳

雨安居の場所：サーヴァッティ (舎衛城) の祇園精舎と東園 (僧院) ・鹿子母講堂

主な出来事 ◇ブツサートィ王の因縁話 (ダンマパダ101)

- ◇「アンバツタ^{スツタ} 経」 (長部3) を説く ◇東園 (僧院) の布施
- ◇ビンピサーラ王の死 ◇デーヴァダツタがブツダ暗殺を企てる (62話) ◇酔象ナ
ーラーギリをおとなしくさせる (63話)
- ◇デーヴァダツタ僧団分裂をたくらむ ◇デーヴァダツタの死
- ◇アジャータサットウ王の帰依
- ◇コーサラ国王パセーナディの死
- ◇「帝釈天^{サツカバンハー} 問 経」 (長部21) を説く

◆ 伝道45年目 (紀元前544年)・・・ブツダ80歳

雨安居の場所：ヴェーサーリー近くのベールヴァ^{ガーマカ} 村

主な出来事 ◇資産家ウパーリがジャイナ教を捨てて帰依 (61話)

- ◇指導者と比丘に七不衰退法を教える；「法の鏡」の教え (65話)
- ◇遊女アンバパーリーの提供したマンゴー林を受け取る (66話)
- ◇サーリプツタとモッガラーナが亡くなる
- ◇四大教法の教え
- ◇スーカラ・マツダヴァを食し腹痛に
- ◇最後の弟子として遍歴行者スバツダを受け入れる
- ◇ブツダの^{マハーバリニツパーナ}大般涅槃 (入滅)

本書の六十九枚の挿し絵は、次のようなことを考慮してデザインされた。姿勢、手のしぐさ、ブッダとその相手の年齢、それと同様に、出来事の場所、時間、規模である。ハンダカ・ヴィッジャーナンダ氏はイラストを綿密に構成し、それぞれすべてのストーリーで起きた主要な出来事をつかむ一方、チョウ・ピュー・サン氏がその構想をもとに、かれのみごとな腕前で美しい作品に仕上げた。

詰まるところ、わたしは、すべての読者が、ブッダが生涯を通して示された偉大な先例に触発されることを希望している。莫大な世界の仏教文学に、この作品がささやかな貢献となりますように。ストーリーを楽しんでください！ イラストを楽しんでください！

善でありますように。幸せでありますように。

クサラダンマ比丘

2004年11月21日、ミャンマーのヤンゴンにて